

ふるさとを語る



兵庫県は、5つの国から成り立っており、多彩な人材を輩出しています。そこで、毎回、さまざまな分野で活躍の方に「ふるさとひょうご」を語っていただきます。

今回は、11月13日（月）にホテル椿山荘東京で開催予定の「総会交流会」において、歌声を披露していただくR&B・ソウルシンガーであり、ソングライターでもある上田正樹さんに、古川県人会事務局長がお話を伺いました。



上田 正樹

うえだ まさき

1949年7月7日、京都府生まれ。岐阜県立岐阜高等学校から兵庫県立福崎高等学校に転入し、卒業。1974年伝説のスーパーバンド「サウストゥサウス」を結成。その後ソロとなり、「悲しい色やね」がシングルチャート1位となる。「Hands of Time」や「Forever Peace」など日本だけでなく、アジアでも高い評価を得ている。

ではないかと、びくびくしていました。
事務局長..その時はビートルズの歌とかですか。

上田さん..ビートルズの背景にある音楽をすごく好きになりました。例えば、ブルースとか。R&Bとか。そういうのを経て、ビートルズも出来上がっている。もちろんビートルズの曲もやりました。全曲を完全コピーしました。楽器も見よう見まねですが、小さな蓄音機で聞いて、音を全部ひらいて。そういうのが今、役立っていますね。

事務局長..学校に内緒でコンサートをされたら、なんとかばれずに高校を卒業されたんですか。

上田さん..ギター部の顧問には、ばれていたらと思います。黙っていてくれたんですよ。だから、本当に感謝しています。その当時、福崎高等学校は結構厳しかったですからね。長髪はダメで丸坊主でした。その頃からですよ。帽子を被る癖が身につきました。
事務局長..高校の学園祭でも演奏されたのですか。

上田さん..演奏させていただきました。ビートルズからバンド名をとり、「ミート・ビーツ」と名付け、ビートルズの曲をやりました。ビートルズの「マネー」という曲で、舞台上寝転がって歌ったら、職員室に呼ばれ怒られました。でも結局、許してもらえました。だから、いい思い出ばかりです。無断で音楽室を使わせていただいたりもしました。先生も気づいておられたと思います。

事務局長..先生もただ好きというだけではない、才能そのものを見抜いていたのかもしれないですね。

上田さん..「やっつらいやん」という、そういうような幅みないな気質がありますよね、兵庫県は。「好きにやっつらえやん」みたいな。兵庫の気候もそうなんですけど、温暖というか、緩やかというか。それが僕

事務局長..福崎町に住んでおられたのはいつ頃のことでしょうか。幼い頃のふるさとの思い出についてお聞かせください。

上田さん..元々は京都生まれです。医者だった父が39歳で亡くなりました。それで母が再婚をし、いろいろとあって僕は小学校2年から4年生の時に、母の実家のある福崎で暮らすことになりました。市川でも遊びましたし、稲刈り後の田んぼに勝手に入り込んで、野球をやったりと自然の中で駆け回っていました。

今から15年程前に、NHKの番組「課外授業ようこそ先輩」の収録で、母校福崎小学校を訪れました。子供達と僕の知り合いのB・B・B・B（ブラック・ボトム・ブラス・バンド）というバンドでマーチングバンドを結成し、福崎の皆さんを元気づけようと駅前商店街を練り歩きました。

事務局長..音楽を始めるきっかけは何でしょうか。

上田さん..小学校4年の時に岐阜に移り、義父も医者だったこともあり、僕も医者を目指して

目指して、岐阜高等学校に入りました。

ところがある日、友達がいギリスのロックバンド「アニマルズ」のコンサートのチケットをくれました。それを見に行き、一晩で夢中になりました。絶対に行きたいなろうと思いました。それまでは音楽は嫌いではなかったですが、生活の中に音楽があるという感じはなかったです。勉強もそんなに嫌ではなかったし。

それがその日以降、シンガーになると言ったので、家族も親戚も大反対でした。当時は音楽は不良がやるものみたいな意識があったと思います。

事務局長..内に秘めたものがそのコンサートで開放されたんでしょうか。コンサートに行かなければ、医者になっていたかもしれないですね。

上田さん..このままレールのの上に乗って、医者を目指すんだろうかみたいな思いはありました。

リアルタイムにビートルズとか、その時代がポップミュージックのルネッサンスの時

ような感じがしましたね。60年代の終わりから70年というのは。そういうのに洗礼を受けたのかもしれないです。

高校2年の時にコンサートに行き、音楽をやると言ったので、塾居を命ずるみたいな感じで、高校3年の時に福崎高等学校に編入することになりました。

事務局長..では、岐阜高等学校の時からバンド活動をされていたのですか。

上田さん..いいえ。岐阜は受験校だったので、周りにそんな人はいなかったですね。福崎高等学校に編入したらギター部があり、そこに入部し、バンドをやることになりました。4人でバンドを始めました。その年の夏休みは一日も休むことなく、毎日練習をしましたよ。今の土台をつくってもらったような感じですよ。

事務局長..そのバンドでコンサートは行っただけですか。

上田さん..姫路にディスコみたいなところが2、3軒ありましたので、学校に内緒で行っていました。いつも学校に見つかると

にとつてはとても嬉しかったですね。一番多感な時期を福岡で過ごせたのはよかったです。と思います。

事務局長・高校を出られてから、京都に住まわれたんですかね。

上田さん・そうなんです。本人ははじめに音楽をやっていたのですが、家族から見たら僕は不良で、なかなか受け入れてもらえなくて。祖父母の後を継いで、呉服屋になれと言われました。それを嫌だと断り、全く何のアテもなかったのですが、京都の家を出ました。

3ヶ月間くらい大阪でホームレス生活を送りました。やはり、どうしても音楽をやりたいかったのです。

事務局長・今で言うところのストリートミュージシャンみたいなことをされていたのですか。

上田さん・その当時はカラオケがなかったの、生演奏をする場所がいっぱいありました。大阪だけでも200〜300カ所はあったと思います。そういうところに、「歌わせてください。」と交渉しました。

3ヶ月くらいでようやくあるバンドに、明日から来なさいと言われました。そのバンドのボーカルとして再スタートです。それが20歳くらいの時です。すごくラッキーなことに、今まで音楽以外の仕事をしたことがないですよ。

事務局長・メジャーデビューのきっかけは何かありますか。

上田さん・たまたまライブをやっていたら、そこに来られたプロデュサーの人が歌を出さないかと声を掛けてくれました。

デビュー曲は「金色の太陽が燃える朝に」というタイトルです。作詞がアンパンマンでお馴染みのやなせたかしさんで、僕が曲を書きました。全く何のツテもなかったの、ラッキーでした。

事務局長・サウストゥサウスはどのように

して出来たんですか。

上田さん・いつも大阪のミナミにいました。心斎橋にその当時、貸しスタジオがあり、お金がないので、誰かがスタジオで練習し、早く終わるとそこに入って練習させてもらっていました。よく練習していたのは「アリス」で、僕らはずっと待っていて、いつもタダで練習をさせてもらっていました。

だから今でも堀内孝雄さんとかメンバーの皆さんとは友達です。その時のメンバーがアメリカ南部の音楽が好きだったんですよ。それで大阪のミナミとアメリカ南部で、「サウストゥサウス」と名付けました。

今でも、サウストゥサウスのギターリスト有山じゅんじとドラマー正木五朗とは一緒にやっています。年齢的にベースリストが亡くなったとか、そんな話題ばかりです。だからこれからも頑張つて、亡くなった人の意思も継いでいかなければいけないと思つています。

事務局長・その後に「悲しい色やね」がヒットするんですね。

上田さん・「悲しい色やね」は1983年くらいかな。ヒットするまでに、2、3年かかっています。本当に口コミで広がって有線放送から火がついて。

音楽は、型にはまると情緒感みたいなものが消えたりします。福岡で過ごしたのは自分にとって本当に良かったと思えます。

30代くらいまでは音楽で売れようという思いがありました。売れないといけないと。しかし、いろいろな国で音楽をやり始めると、もつと表現者として磨かれないといけないという思いがすごく強くなりました。まだまだ途中経過という感じ。何百曲作っても、新たな1曲は生みの苦しみです。**事務局長**・その後の音楽活動について教えてください。

上田さん・何十年もブルースやR&B、い

わゆるルーツミュージックをやってきたので、どの国に行っても演奏が出来て、理解してもらえます。だから、最初にこれだと思つてやつて来たことが間違いはなかったと思います。海外でも評価をしていただき、インドネシアではレコード大賞を2回いただきました。音楽は国境を越える。

最近、大学の文学部の表現文化学科で、ブルースのルーツなどについて講演を行ったりしています。昨年もアフリカに行きました。このように音楽が生まれたということを見せたい。日本はそういうものが伝わりにくい風土がありますが、そういうものを次世代に伝えたいと思つています。アフリカからミュージシャンを呼んで、実演したり。だから、今が一番面白いかもしれないですね。

事務局長・東日本大震災でもいろいろと活動されていますね。

上田さん・国土緑化推進機構がバックアップしてくれて、「今ある気持ち」という曲を書きました。千円以上の募金をしていたの方に配布しました。

東北には、この5年間ずっと行っています。子供達が傷ついている感じがするんです。夏の海岸で子供達が遊んでいるのが普通はよく見る光景ですが、大震災以降、日本ではその姿を一度も見ることがないです。

倫理的な配慮から、人がどうやって死んだのかという映像をマスコミが映さないのはわかりますが、子供達はそういうのを現実として見えています。子供達と一緒に何かやろうと思ひ、「今ある気持ち」を石巻市稲井小学校の生徒400人と、僕の母校である岐阜県高山市にある松倉中学校の生徒400人の800人とで合唱をし、レコーディングをしました。

事務局長・福岡高等学校80周年でもライブ

をされたようですね。

上田さん・高校時代にバンドを組んだ4人でやりました。何十年ぶりに練習をして、うーん、ほろほろでしたけど。でも、面白かったです。それが本当に原点なんです。

事務局長・今年11月に総会交流会のステージをお願いしたいと思ひます。兵庫を離れ、東京で活動されている方に対するメッセージをお願いします。

上田さん・あんまり大層なことは言えないですが、東京にしていると、悪くいうと、ものすごくきさきさになる感じがします。人があふれ、人と人がすれ違つても、当たつても、なんか殺伐としてくる感じが生活の中にあると思ひます。そういう時は必ず兵庫県の温暖な気候とか優しい友達とかを思い出します。そうするとまた穏やかな心になります。やはり兵庫県がいいですね。兵庫県の環境、風土もいいですね。

福岡の自分が小さかった時の思い出を歌にしようと思つています。テーマは「WAVE BACK HOME」。ここ5、6年のテーマなんです。家に帰ろう、最初の戻るべき場所に帰ろうみたいな。

事務局長・総会交流会でぜひ披露していただきたいですね。楽しみにしています。

